

## 浄土を求めさせたもの — 『大無量寿経』を読む—

## 第 116 回 (2018.11.6) の要旨

## 拝読文(『真宗聖典』62～63 頁)

自然の非悪、先ず随いてこれを与う。恣に所為を聴してその罪の極まるを待つ。その寿未だ尽きざるに、すなわち頓にこれを奪う。悪道に下り入りて、累世に勤苦す。その中に展転して数千億劫なり。出ずる期あることなし。痛み言うべからず。甚だ哀愍すべし。」

仏、弥勒菩薩・諸天人等に告げたまわく、「我今、汝に世間の事を語る。人これをもつてのゆえに、坐して道を得ず。当に熟ら思い計りて衆悪を遠離すべし。その善の者を扨んで勤めてこれを行ぜよ。愛欲栄華常に保つべからず。みな当に別離すべし。楽しむべき者なし。仏の在世に曼い当に勤めて精進すべし。それ心を至して安楽国に生まれんと願ずることある者は智慧明達し功德殊勝なることを得べし。

\*\*\*\*\*

「三毒五悪段」(『聖典』58 頁 2 行目～)と呼ばれるところを読み進めています。この段は『無量寿経』にはありますが、異訳の『無量寿経』には必ずしも入っておりません。しかし、親鸞聖人はこの段に大変大切な問題を見ておられるようです。それは本願の教えが衆生に呼びかけるときの、その呼びかけられるべき衆生の在り方、すなわち親鸞聖人が繰り返し押さえておられるのは、罪悪深重・煩惱熾盛という、生きることに夢中になって他人のことなどはお構いなしというか、そこに自我の思いが強く出て、そして自分中心主義を傍若無人に振る舞って生きてしまうという、そういう在り方です。それが一人だけということではなくて、お互いにそうやって生きているということがどういう結果をもたらしてくるのか。そういう事実、その事実の在り方をこの三毒五悪段といわれる段では徹底的に呼びかけてあきらかにしながら、そこに本願の教えがおこってこざるを得ないといえますか、そういうような意味で大切な段であるというふうにご覧になっているようであります。(中略)

「悪道に下り入りて、累世に勤苦す」。悪道とは、仏教では流転のうちの三つの状況、地獄・餓鬼・畜生という状態を三悪道というのですけれど、悪道に墮ちるということは、悪道に墮ちるような必然性をもった行為を前の命でしてきたから悪道に墮ちるのだと、そういう展開で教えが説かれるのです。ですからこの箇所も、我々が現世で生きているときに、何か人間の持っている自我中心主義の思いというものが行為となって現れて、その現れ方がどうしてもひとりでの迷惑をかけるような悪を為してしまうというか、そういうように動いてしまう。無明があって、業(行為)が起こる。行為が起こると苦悩を引いてくる。その苦ということが現世の苦にとどまらないで、次の命にも影響を与えてくるわけです。流転は、命が生まれかわり死にかわりしながら迷いの命を繰り返して引いていくという、ある意味で神話的な表現と言われますが、現世の私どもの時間のなかにも、「今」という時のなかにも、そういう過去と未来というものが感じられてあるわけでしょう。そうすると現世の在り方で行為が悪であれば、次の在り方の時には悪道に墮ちていく。(中略) この箇所の場合は、文字通り神話的な意味の三世という、過去世があり現世があり来世があるという考え方ですから、そういう未来世に悪道に墮ちていくと。そういうことが累世、つまり世を重ねる。その命が何回も何回も重なるということ。それが「累世に勤苦す」ということ。とにかくそういう悪業の結果、苦を引いてくるということの積み重ねがいつまでも続いていくというのです。「その中に展転して数千億劫なり」。億劫

という時間も神話的な時間ですが、とにかく途切れることがないままにグルグルグルグルと命が、苦悩の命として現象して、それがまた次の命に罪悪を重ねた結果が及んでくる。そういうことが繰り返し行われる。そして「出ずる期あることなし」と。期というのは、時を表わす字ですね。「さいご」というとき、後ろという字で最後と書いた場合は、ここで最後だよというような意味ですが、この字（期）を使った場合は命の終わり、臨終を表わす字になります。ですから「出ずる期あることなし」とは、脱出できる時はないということですね。善導大師は「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あることなき身」と言われましたが、これは「機の深信」、そういう苦悩の命の繰り返し、積み重ねというものから出ることが出来ない、「出離の縁あることなき身」であると。人間の持っている業の必然性があるから出ることが出来ない。こういうことがこの箇所では押さえられて来ているわけですね。（中略）

流転の因果は我々自身からは断ち切れない。流転を脱出することは出来ないのです。にもかかわらず「みな当に別離すべし」「勤めて精進すべし」と、脱出せよと教えるその仏陀の教えとは絶対の断絶があるわけですね。我々からすれば煩惱の命、煩惱の心がしょっちゅう起こってしまう。本当に我々は、ちょっと真面目な顔をしてはみるものの、心の中は、不平不満やら、瞋りやら、妬みやら、そねみやら、いろんな煩惱でいっぱいですよ。それが噴出してくるのを押さえることはできない。そういう身でありながら清浄の仏道を求めるということには、絶対の矛盾があるわけですよ。成り立ち得ないはずなのだから。（中略）ところが、仏教は人間が仏に成れるという考え方だから、これは一神教の transzendental、つまり超越性とは違うわけです。一神教では、人間が神に成るということは絶対にできない。それが超越性というか断絶性なわけですけど、仏教の場合はそこに転換を認めていますから、単に連続しているのではないわけです。この愚かな凡夫の身が大覚、本当にさとりをひらけば仏陀であるという、そういう大転換を人間の身の上に認めるのが仏教なのです。だけど、そこに断絶を認めないようになると墮落仏教になってしまう。断絶はあるけれども、それを転換するのです。（中略）

それを善導大師は「横超」という言葉で言っていますが、ここに親鸞聖人は注目されたわけです。（中略）真実信心、信心というもの、我々凡夫がいただく信は凡夫に起こる信だけれども横超の信心、つまり「横超断四流」という意味内容をもった信心である。横超の大菩提心であるとまでおっしゃるわけです。自力でおこす菩提心ではないけれども、信心がそのまま仏に成ることができるから、それは大菩提心であると。菩提（さとり）を成就する心、これが菩提心である。菩提心を成就したいという心が成就することが出来るという道が本当の菩提がひらけるということであると。我々愚かな凡夫であっても、信心ひとつで菩提心を成就し得る。それが「横ざまに超える（横超）」ということだと。

親鸞聖人の概念では、横ざまに超えるということは本願力を表わしています。本願力というのは、他力ですね。本願他力を依り処にするならば、どれだけ愚かな凡夫であってもそのままこの断絶を超えられるというのです。（中略）徹底的に本願力を信じたならば、つまり本願他力を信ずるということは、我々の有限なる心がどうあろうと、煩惱があろうと、罪業があろうと、大悲は見捨てないのだと。これを信ずればよいのです。それを信じて、一途にそれを信じて後、この世のことは、この世で因縁のままにこの世に起こった因縁を尽くしていくしかない。そしてその一生が不退転であると。こういうのが親鸞聖人の信心ですね。そういう眼から「願生安楽国者 可得智慧明達 功德殊勝」（『真宗聖典』63頁）という言葉をいただいております。

だから願生すれば、願生した途端に浄土の衆生となるのだと、往生を得るのだと。これが難思議往生ということなのです。難思議往生とは常に今、常に今ということは、今が今に連続するわけですから、今が終わらないわけです。今が今に連続しつつ、常に念仏と共に往生するという事実が起こりつつある。そういう不思議なことを言われるわけです。生れんと願ずるという欲生心、欲生心がそのまま成就してくる。でも我々は、願生に立つ。願生とは自分で願うのではない、本願を信ずると。本願を信ずれば涅槃はそこにある。こちらから取りに行く必要がない。断絶されていた涅槃が、本願を信ずるということにおいて翻される。生死の命が涅槃に直結する。断絶を超えて直結する。こういう論理として、本願力がはたらくことを信ずる。信ずるということは、我々にもう四流を超えさせるのだと。流転を超えさせるのだと。我々からは、超えることなど出来ない。兆載永劫に迷い続けるしかないような身が、ここで超えさせてもらえる。こういう道が本願力を信ずることなのだ。そういうふう徹底して親鸞聖人は、今仏法に出会う、今本願力に出会うのだとおっしゃる。死んだ時に出会うのではないのだ。今ここで本当に信ずるなら、信ずることが勝負であって、そこでもう本願が呼びかけていて我々の断絶が乗り越えたいという欲求は完全にそこで満たされるのだと。

ですから「本願力にあいぬれば むなしくすぐるひとぞなき 功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし」（『聖典』490頁）、煩惱が隔てるなどということはないということです。向こう（本願力）がもう邪魔としないというはたらきをして下さるのだと。それが横超である。横ざまに超えるのだと。（中略）我々のようなへなちょこの心、なんだかしょっちゅう変わりゆく心、移ろいゆく心。本当に頼りない心を生きている、そういう心と矛盾せずに大悲の心が、大悲のはたらきが来ているのだと。これを信じさえすれば断絶など乗り越えられるのだと。だから「証知生死即涅槃」、もう生死は即ち涅槃であると証知するのだと。それが横超の道である。「横超断四流」の道である。（中略）濁世の直中に教えに出会うなら、教えを聞くなら、もう「智慧明達し功德殊勝なることを得べし」（『聖典』63頁）と。本当に信心の智慧明らかに達することが出来る。我々は愚かである。我々は愚かであるけれども、如来の本願力の明るみが来る。その明るみの中に生きていけるということが、本当に人生がある意味で、不平不満があったり、欲求不満があったり、ともかく問題だらけの人間として生きているのだけれども、それと矛盾せずにそれがなくなってではないのですよ、それと矛盾せずに光が、光明摂取の利益があるのだと。そこを信ずると。徹底的にそういうことを言われるのですね。

善人心を出して少しでも善いことをして、そうしたら助かるだろうというような心は、自力ですから、疑いになるわけです。本願力を信ずる心が欠けてくる。本願力を信ずるということは、我々はどうやって見ても罪悪深重でしかないのだと。もちろん心に、人間関係の中でちょっとは善いことをしてみたいという心が起こらないわけではない。でも、それは本当に成就することが難しい。そういう因果の、有限の因果を迷いながらしか生きられない身であるということと、無限大悲がはたらくということは矛盾しないのだと。そのこと一つを信ずると。（中略）生活の直中に光を信ずる。単なる闇ではないのだと。そういう道が開かれるということが親鸞聖人の出あった明るみだと思ふのです。もちろん人生は明るみだけではない。薄暗がりというか、曇りの日もある。雨の日もある。むしろその方が多いかも知れない。だけどそこを尽くして本願力を信じていこうではないかというのが、親鸞聖人の教えですね。（中略）

ここを親鸞聖人は注目されて、つまりこの箇所直前まではあたかも本願の教えとは関係ないように説かれてきたけれども、ここで「安楽国に生まれんと願ずることある者は」（『聖典』63頁）と言ってくる。安楽浄土とは『無量寿経』の本願、つまり法蔵菩薩の本願が我が国に来たれと呼びかけて、この国をつくり上げるために法蔵菩薩がご苦労下さっている場所です。そ

こには、どんな凡夫も、どんな罪業があろうとさまたげるものがない。そういう大悲の場所ですから、その大悲の場所に命を得るならば、それはこの罪濁の命、流転の命と命自身は変わらないわけですが、命の営みが変わるのではなくて、それを汚しているような心が転換される。そうするとそこにもう……、これ（この箇所）非常に不思議な展開になっているわけですね。「仏の在世に曼い当に勤めて精進すべし。それ心を至して安楽国に生まれんと願ずることある者は」と。そこに、ある意味でものすごい“転回”が起こっているわけです。一生懸命勤めたならば、そして一生懸命真面目に願生した者はみたいな、するっと変わっているように見えるけれど、ここにやっぱり呼びかけている衆生とそれが本当に翻された場合の衆生との間に教えがあるという、ここが一つの謎になるわけです。ここに親鸞聖人は本願がおこる必然性があるのだと、こういうふうに読まれたわけでしょう。それは今のテーマの『無量寿経』を読むについて、『無量寿経』が何故これだけ読まれるのか。『無量寿経』の教えが何故何回も何回も翻されたのか。そしてなぜこの教えが深く人々の心を打つのか。そういうことの大事な秘密がここにあるのだと思うのですね。

今日は、ここまでにしておきましょうか。

文責：法隆誠幸（親鸞仏教センター嘱託研究員）